

### 「在留許可を求める子どもと歩む会：ぬくもり」設立

在留資格のない両親のもとで生まれ育ち、基本的人権が保障されていない外国ルーツの若者の声を聴いた日本のカトリック司教団は、「日本を故郷と思っている子どもたちとその家族を追い出さないでください。一人でも多くの人に在留特別許可を与えてください」と2022年3月に法務大臣宛の要望書を提出。その後、17人の司教全員がYouTube(動画配信サイト)でビデオメッセージを出し、オンライン嘆願署名キャンペーンを開始。

この司教団の動きに合わせ、7月2日に夙川教会で阪神地区の有志が「日本生まれで外国籍の子どもの『声』を聴く会」を開催。より多くの方に知っていただくため、9月23日に大阪梅田教会聖堂で「学習会」を開催。当事者のMさん(大学3回生)と弟のSさん(大学1回生)の訴えを聴き、これまでの裁判で弁護にあたってこられた空野弘弘弁護士が「入国管理法が改悪されないためには、この動きを止めないことが大切」と話された。会場で司教団のビデオメッセージを放映。より広く、より多くの署名を集めるために署名用紙での署名を開始。10月の大阪教区司祭月修でも、小教区や修道院での署名活動をお願いし、「署名」は3,206筆(12月末現在)が集まり、応援メッセージも多く寄せられた。

そして、思いを同じくする人たちが、小さな力を合わせて継続的に支援していこうと、12月3日に「在留特別許可を求める子どもと歩む会：ぬくもり」を設立。この会は、日本で生まれ育ちながら、在留資格を持っていない子ども・学生を、在留特別許可を得るまでの間、支援し、人権の確保に寄与することを目的とする。今後は、J-CaRM(日本カトリック難民移住移動者委員会)やシナピスと協働し、子どもたちの人権を守る社会にしていけるための支援活動を実施したい。なお、子どもたちが学業を継続するための経済的な支援も喫緊の課題であり、奨学金の設立を考えている。併せてご協力をお願いしたい。

「在留特別許可を求める子どもと歩む会：ぬくもり」 連絡先：090-3943-4416

#### 【「東京クルド」上映会のお知らせ】

日時：2023年3月4日(土)13時半から  
場所：夙川教会聖堂地下ブスケホール  
ぜひご来場ください。



## 聞かせてください 神さまと出会った時のこと

大阪教区で働く司祭・修道者ご自身の体験をきく  
第2回 高島政行神父(堺ブロック)

大阪府守口市の生まれ。4人きょうだいの末っ子。一番上の兄は、入園式の日から一人で電車に乗り、香里幼稚園に通ってしまっほど優秀でしたが、卒園式前の2月2日に肺炎で亡くなります。香里教会のシスターや神父たちの支えにより、家族は受洗。2月2日は「主の奉獻」の日。私たち家族は、兄が亡くなり、神様にささげ、キリストに出会うことができた。その恵みを感じています。

幼稚園の頃、かなり着古した服を着たスペイン人の神父と出会った。母から「神父さんは私たちのために、結婚もせず、死ぬときも日本で死んでいくはるんや」と聞き、なぜか「そうならないな」と思った。そして、玉造の小神学校に進みます。ある日、一緒に生活していた和田幹男神父に、「天国があっても神様おれへんかったらどうするの?」と聞くと、「そんならどうでもええねん。僕は神様に賭けてるんや」と。自分の人生を神様に賭ける、だから神父をやっている。なるほど、僕と一緒に。和田神父の言葉が、心の中に響き渡りました。

英知大学に進み、ラグビーに明け暮れる毎日。卒業後は上智大学に編入する予定が、行き違いで、私が神学生をやると田口芳五郎司教に伝わり、私を離さない」という信仰を

持ち続け、いつか神様ののもとに帰り、光と一体になるときまで、そう信じて生きていきたい。死んだ兄や父母は、離れた世界にいてはなくて、今私と共に生きている。彼らの生きた証として、私は今を生きている。キリストも私たちの中に生きている。私がキリストの命を生きていることによって、人びとを支え、一緒に歩むことができると思いながら、司祭をしています。

女が自分の乳飲み子を忘れるであろうか、母親が自分の産んだ子を憐れまないであろうか。たとえ、女たちが忘れようともわたしはあなたを忘れることは決してない。見よ、わたしはあなたをわたしの手のひらに刻み付ける。(イザヤ書49・15-16)

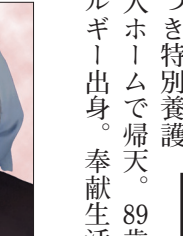
【12月のお話より抜粋。サクラファミリアで2か月に1回開催中!】

### 訃報

Sr マリア・コンソラータ 村上良子(西宮聖クララ会)は、2022年11月18日、間質性肺炎による呼吸不全のため仁豊野ヴィラで帰天。93歳。静岡県出身。奉獻生活70年。



Sr ドミニク光 恵(マリ・ルイーズ・マン)(聖母被昇天修道会RA)は、2022年12月4日、老衰のため、あかつき特別養護老人ホームで帰天。89歳。ベルギー出身。奉獻生活69年。



戦後まもなくミッシェンスクールを卒業し、市役所で働く。両親は医専に入れたがっていたがクララ会に入会。1953年初誓願後、会での日々の担当は裁縫と台所で、シスター達の食生活に貢献された。小さな草花を愛で、絵が得意でちょっとしたスケッチを楽しみ、手紙にはいつも絵が添えら

1958年来日。日本語の習得と硬筆・書道に励み、箕面の学院で宗教と仏語を長年担当した。2001年に小岩修道院(東京)に移り、聖書グループや東京方面の卒業生と関わった後、再び

## 「生きる」難民移住者

門を叩き続ける人と、門をこじ開けてくれる人

去年の2月、タリバンの迫害を逃れて日本へ退避したロキアさんは今、シナピスの職員として関東のアフガニスタン人を支援する仕事をしています。ロキアさんを見て私は彼女の視点には海や陸の境界がないことに気づきました。

ある日、ロキアさんは「飢えと寒さに晒される子どもたちがいる」と相談してきました。「その子らはどこに住んでいるの?」と聞くのと「西カブル」と答えるのです。アフガニスタンでは、タリバンによって立



場の弱い少数民族の人びとが仕事や土地を奪われ、最も脆弱な子どもたちから先に命を落とすというのを見てきました。生きるすべを奪われた人びとは、誰かの慈悲にすがることがありません。ロキアさんたちは個人的にお金を集めては細々と送金しますがとても追いつかず、シナピスの「こども基金」の援助を申し出たのでした。特に貧しい地域

の子どものために薪と小麦粉を配る緊急援助は、こども基金で承認され40万円を現地へ送りました。冬季休暇を間近にして閉館の準備をしていた年の瀬、再びロキアさんから「寒波に見舞われて子どもたちが凍えています」と支援の要請がありました。もう年末の今では稟議を諮るのには難しい、と

緊急対応。今から送金すると担当者にもメールして、それでも後からもめるようなら、こどもの里がカンパします」と一言に背中を押された私は、閉館間際の12月29日、追加の30万円を送金しました。

合議だ年末だと躊躇する私に「うん」と言わせるまで迷わず門を叩き続けるロキアさんと、「送金が先。それでもめたら私が引き受ける」と受けて立つ庄保さんと。空腹で凍える子どもがいたら大阪でもカブルでも等しく助けるのみ。単純明快な二人の実行力に私は頭を下げるしかありませんでした。

(文)シナピス事務局 (イラスト)ピスカルド篤子

**カトリック墓地 納骨堂・納骨所 使用者募集**

信者のみならず、ご家族の方もお申し込みいただけます。インターネット上で詳細をご覧ください。

資料請求やお問い合わせは 大阪教区本部事務局 管理課 竹中まで 06-6941-9705